呉錦堂を語る会通信

NO.18　May.　2015

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日　2015.5.15

呉錦堂は孫文と宋慶齢の結婚式・披露宴に出席したか？

呉錦堂は孫文と宋慶齢の結婚式・披露宴に出席したか？これはなんとも悩ましい問題です。「呉錦堂を語る会」の一員として空想するのは、「結婚式・披露宴の出席者の集合写真があって、呉錦堂が写っている」そんな奇跡ですが。事実はどうだったのでしょうか。（編集委員　橘雄三）

《『大人物小故事　我的外公呉錦堂』「美酒漂香」》

一年半程前、孫文記念館の資料室で、曹愛徳著『大人物小故事　我的外公呉錦堂』という興味深い本を見つけました。著者の曹愛徳氏は、呉錦堂と魏夫人との間に生まれた女性（呉魏瑤仙氏）の三女です。この本は、母瑤仙氏の語りを書き留めた18の短い話から成りたっております。ご本人の承諾を得て、当『呉錦堂を語る会通信』（以下、「通信」と略記）の第９号から、順次、掲載しております。

「通信」第16号に、『大人物小故事』（10）として「美酒漂香」を掲載しました。孫文と宋慶齢の結婚式・披露宴に出席し、酔って、機嫌よく帰宅した呉錦堂と呉錦堂を迎える幼い娘とのやりとりが話の中心になっております。

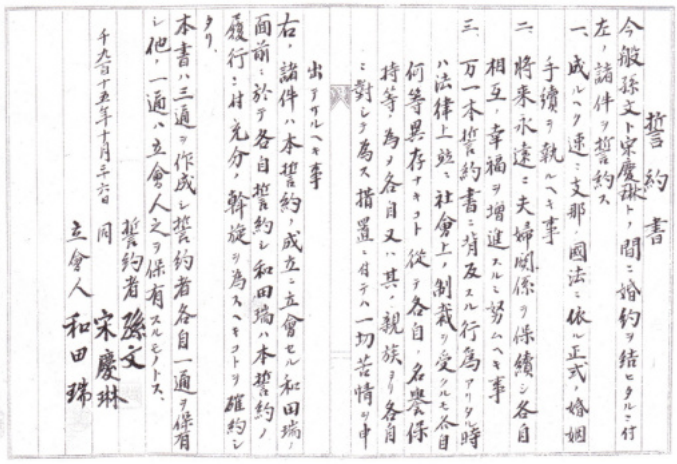
私はこの話に出会い困惑しました。「呉錦堂を語る会」の一員として、呉錦堂が孫文と宋慶齢の結婚式・披露宴に出席したというのはすばらしい出来事です。と同時に気になったのは、その信憑性です。読み終わって、まず、引っ掛かったのが、場所的な関係です。孫文と宋慶齢の結婚式・披露宴というと、場所は東京です。ところが、この話には、呉錦堂、魏夫人、著者の母瑤仙氏、ほか複数の使用人が登場しますし、また、呉錦堂が帰宅したときの「大門の音が聞こえました」などという表現は、どう考えても神戸の自宅です。逆に、呉錦堂の語り、「新婦は若くきれいで…とても美しい女性で、以前、アメリカに留学した大才女で、夜、ピアノを一曲弾いてくれた。新郎は本当に果報者だ。」といった表現はその場に居合わせた者だけが言えることです。

孫・宋結婚式への呉錦堂の出席について話す錦堂学校の優等生童玉民氏（呉錦堂生誕百四十年記念CCTV制作《難忘錦堂》より）

《宋慶齢基金会久保田博子先生に教えを請う》

困り果て、宋慶齢のことならこの方にと思い、厚顔を承知で、宋慶齢基金会の久保田博子先生に疑問をぶつけました。久保田先生は、私の質問に、丁寧なお返事をくださいました。

1915年10月25日の東京・新宿区袋町の和田瑞（ミズ）邸における孫文と宋慶齢の結婚式の参会者につきましては、孫・宋と立会人和田瑞の三人だけだったとしか考えられません。（日本外務省外交文書“孫文ノ動静”）、当日は和田邸で晩餐の後、三人で乗用車で外出、和田を溜池のお茶屋に送り届けた後、孫宋は原宿の新居に帰宅しています。“孫文ノ動静”では近日披露宴を催すらしいとの記事が見られますが、梅屋庄吉邸を訪問し、お茶の接待を受けた以外、過密なスケジュールが記録されるだけで、それらしい動きは見られません。


誓約書

今般孫文ト宋慶齢ト、間ニ婚約ヲ結ビタルニ付
左ノ諸件ヲ誓約ス
一、成ルベク速ニ支那ノ國法ニ依リ正式ノ婚姻
手續ヲ執ルベキ事
二、將来永遠ニ夫婦関係ヲ保續シ各自
相互ノ幸福ヲ増進スルニ努ムベキ事
三、万一本誓約書ニ背反スル行為アリタル時
ハ法律上並ニ社會上ノ制裁ヲ受クルモ各自
何等異存ナキコト從テ各自ノ名譽保
持等為メ各自又ハ其ノ親族ヨリ各自
ニ對シタル為メ措置ニ付テハ一切苦情ヲ申
出ヅルベキ事

右ノ諸件ハ本誓約ノ成立ニ立會セル和田瑞ノ
面前ニ於テ各自誓約シ和田瑞ハ本誓約ノ
履行ニ付充分ノ斡旋ヲ為スベキコトヲ確約シ
タリ
本書ハ三通ヲ作成シ誓約者各自一通ヲ保有
シ他ノ一通ハ立會人之ヲ保有スルモノトス
誓約者　孫文
宋慶齢
千九百十五年十月二十五日　同
立會人　和田瑞

孫文と宋慶齢の結婚契約書　　立会人 和田瑞
（中国革命歴史博物館所蔵）

（次頁へ続く）

大人物小故事（13）

我的外公吴锦堂

曹愛徳著

今回は、「一枚の古い写真」を載せました。お楽しみください。なお、日本語訳は編集委員が担当しました。

一张旧照片

外公家乡有杜，白二湖，为蓄水灌田之用，年久失修，倾塌不堪，形势危急。为造福乡民，外公毅然决定出巨资修复杜，白二湖，由于工程的庞大，加上多变的天气，给长达六，七年的修复工程带来了想象不到的困难。但是我外公没有惧怕，也不退缩。我妈妈曾经说过：“外公为父老乡亲上刀山，下火海也不怕的！”

为了确保水利工程的顺利进行，外公不惜重金雇工抢筑，并准备与日本工程师亲临现场的关键时候，心爱的小女儿突然得急病了，生命随时都有危险，作为父亲怎么舍得离她而去呢？当时外公的心情如压了重山，但是想到父老乡亲的切身利益，外公还是硬硬心肠，不顾一切地飞速归国。由于连日的奔波，外公的脸色憔悴，疲劳不堪。谁知刚到，天气又突然变化，大暴雨又来了，可怕的洪水暴发，向工地涌来，洪波翻滚，吼声雷动，抢险严峻，惊心动魄。万一大堤决口，大片的村庄，农田都会冲垮，淹没，重新修建的水利设施将彻底毁灭。形势险要，外公又一次高额赏金组织抢险队，还亲自撑一把特大号的铜管黑洋伞，赤着脚涉水督工。这种动人的场面连日本的测绘师也万分惊叹，啊！这是多么让人难忘的一道风景，真是世所罕见，就悄悄地拍下了一张珍贵的照片。在场的众多民工也被深深地打动了，当时日本的测绘师还忍不住地劝外公：“吴先生，你是一位在日本阪城地区赫赫有名的巨商，而且入了日本籍，完全可以过上舒适安稳的日子，何苦还要冒着生命的危险，费千金万银来受这苦？”

岛总庶攝井題跋

一枚の古い写真

祖父の故郷には、杜、白二湖があり、貯水、灌漑の用をなしていましたが、長年、修理をしないままになっていて、倒壊寸前の状態でした。故郷の人々の幸せのために祖父はためらうことなく、杜、白二湖の修復に巨資の投入を決めました。工程が膨大で、その上、天気が変わりやすいこともあり、６、７年の長きに及ぶ修復工事は、不測の困難を含んでいることが考えられました。しかし、祖父は、恐れも尻込みもしませんでした。母は、かつて、「祖父は、故郷の人々のためなら、剣の山や火の海といえどもひるまない！」と言ったことがあります。

水利事業の順調な進行を確保するため、祖父は、資金と労力を惜しまず投入して緊急工事を進め、しかも、自身、日本人技師と一緒に、現場に臨む予定だった肝心な時に、愛する小さな娘が、急病になり、命が危ぶまれ、父親として、どうして、娘と離れて現地へ行けようか？その時、祖父の心情は、重い山に押しつぶされそうでしたが、故郷の人々のため、切羽詰まった公益を思い、祖父は、心を強くし、一切を顧みず、飛ぶように中国へ戻りました。連日の苦労、奔走で祖父の顔は憔悴し、耐え難いほどに疲れていました。故郷へ戻ってくると、あろうことか、天気が一変、大暴風雨になり、突然、恐るべき洪水がおこり、工事現場にどっとやってきました。大きな波が逆巻き、雷鳴のようにごう音が響き、緊急工事は非常に厳しい、はらはらする状態で進められました。万一、大堤が決壊すると、ほとんどの村も田畑も押し流され、水没し、新たに建設した水利施設は徹底的に壊滅です。情勢は厳しく、祖父はまた、高額の賞金を出し、緊急修復隊を組織し、自ら、金属骨のサイズの大きな黒い洋傘をさして、裸足で水に入り、工事を監督しました。このような、人を感動させる場面は、日本人の測量技師さえも驚嘆させ、ああ！これは、なんと、長く記憶に残る光景で、この世でまれなことだと、こっそりと一枚の貴重な写真を撮りました。現場にいた多くの作業労働者たちは、深く感動しました。その時、日本人の測量技師が、たまらず、忠告して、「呉先生、あなたは、日本の大阪のかくかくたる有名な巨商で、しかも、日本国籍を持っていて、完全に、快適、安穏な日々を過ごせる方なのですから、わざわざ、生命の危険を冒して、千金万銀を費やして、進んで苦労しなくてもいいじゃないですか。」

（次頁、下段へ続く）

呉錦堂令孫魏瑜氏ご家族、孫文記念館来館

３月17日、午前、呉錦堂令孫魏瑜氏とご家族が孫文記念館に来られました。魏瑜氏は、呉錦堂と魏夫人との間に生まれた呉魏瑶仙氏の二女です。昨年の夏、蘇州に曹愛徳氏を訪ね、その報告を当通信第15号に載せましたが、魏瑜氏（1934年8月生まれ）は曹愛徳氏(1935年12月生まれ)のお姉さんで、南京在住です。この日、氏は、ご子息ご夫婦、お孫さんと一緒にお見えになりました。（編集委員　橘雄三）

《舞子海岸の砂浜で遊んだ呉錦堂の孫娘三人》

これは、昨年夏、蘇州で、曹さんにいただいた写真です。そのとき、曹さんは、「日中の戦争が激しくなって、私たち姉妹は祖母に連れられ帰国の途につきました。写真は香港行きの船上で撮ったものです。香港を経て、両親が待つ上海までの旅でした。祖母に抱かれているのが私です。このとき、４歳だったと思います。祖母の足元、向かって右は、すぐ上の姉で、今も南京で健在です。左に立つのが一番上の姉ですが、既に亡くなっています」と話されました。その、曹さんのすぐ上のお姉さんが今回、来館された魏さんなのです。

魏さんの、今回の来日の目的は二つあって、一つは、留学中のお孫さん、劉一凡さんの卒業式出席で、いま一つが移情閣（孫文記念館）来館だったのです。

《穏やかな春の海を眺める魏さん》

魏さんは、穏やかな春の海を見ながら、「ここの海岸で砂遊びをしました」と、７０数年の記憶をたぐるように話されました。

庭に出て、どこで写真を撮りましょうかと訊ねると、大きな孫文像の前を通り過ぎ、ここが好いと、小さな「旧呉錦堂別邸」碑の横に立たれました。

（「一枚の古い写真」、前頁から続く）

话还没说完，一阵枉风骤起，啊！我的外公连人带伞被卷进了湖中。正在千钧一发之际，一民工奋不顾身地跳入湖中，竭尽全力抢救外公，终于保住了外公的性命，另外几个民工迅速地脱下了干衣服让外公换上，当时外公还是继续顽强屹立在抢修的前哨。试问这与当今的英雄有何区别，我真的感到外公比英雄还要英雄，为家乡兴修水利，为父老的生计，外公又破重金，又费心机，甚至连自己的骨肉，亲人和生命都置之度外，真可谓达到了“拼输性命与钱财”的境界。

这一张在风里，雨里留下来的旧照片的故事深深地印在人们的心坎里，让我永远刻骨铭心。

まだ、言い終わらないうちに、突然、一陣のつむじ風がおこり、あっ！祖父は傘をさしたまま、湖中へ巻き込まれました。まさに、危機一髪、一人の作業労働者が発奮、身を顧みず、湖中に飛び込み、全力を尽くして、祖父に救急手当を施し、祖父の命を取り留め、また別の数人の作業労働者は、素早く服を脱ぎ、祖父に、乾いた服に着せ替えさせ、祖父は、その後も、粘り強く、緊急修復事業の第一線に立ち続けました。一体、当世の英雄とどこか違いがあるでしょうか。私は、祖父こそ英雄だと思います。祖父は、故郷の水利施設建設のため、故郷の人々の暮らしのため、多額のお金を費やし、苦心し、自分の肉親、身内、生命さえ度外視して、本当に、生命と財産を献ずる境地に到達したと言うべきです。

この一枚の、風雨の中に留まる古い写真の話は、人々の心の奥底に深く跡を残し、私は、心に銘記して永遠に忘れません。

［補注］前頁の呉錦堂が傘をさし湖中に立つ写真、出典は孫文記念館所蔵『續刻杜白両湖全書』です。

呉錦堂は孫文と宋慶齢の結婚式に出席したか？（1頁から続く）

《たった一度の約束－時代に封印された日本人－》

そんな時期、テレビ大阪で『たった一度の約束－時代に封印された日本人－』という梅屋庄吉と孫文の盟約を描いた映画が放映されました。その最初に、梅屋庄吉邸の庭での孫文と宋慶齢の結婚披露宴の様子が映し出されました。集合写真撮影のシーンもありました。私は、「集合写真に並んでいる人々の中に呉錦堂がいたら面白いのに」などと思いながら見ていました。

ところで、この映画は何を根拠に作られたのでしょうか。車田譲治著『国父孫文と梅屋庄吉』中の国方千勢子(梅屋庄吉の長女)聞書の記述に良く似ております。

《車田譲治著『国父孫文と梅屋庄吉』はフィクション》

久保田博子先生にまた一つ質問をしました。

もう一つ、釈然としないことがあります。車田譲治著『国父孫文と梅屋庄吉』中の記述です。この本の記述では、「孫文と宋慶齢が結婚したのは、青島陥落を祝う花電車が、東京の市街を走ったころ。11月25日。」、「結婚式の場、また披露宴の場に選ばれたのは、庄吉邸二階の大広間。」となっています。また、国方千勢子聞書として、「当日、庄吉邸には、中国革命を支援している政客、志士中の主だった者が参集していた。犬養毅、頭山満、内田良平、古島一雄、小川平吉、杉山茂丸、寺尾亨、宮崎滔天、萱野長知、佐々木安五郎その他…」など、参会者の名前も出てきます。

研究と伝記・伝聞の違いと理解すればいいのでしょうか。私は、もちろん、研究の手法で事実にたどり着きたいのですが。

今回も、久保田先生から、次のような非常に貴重なお返事をいただきました。

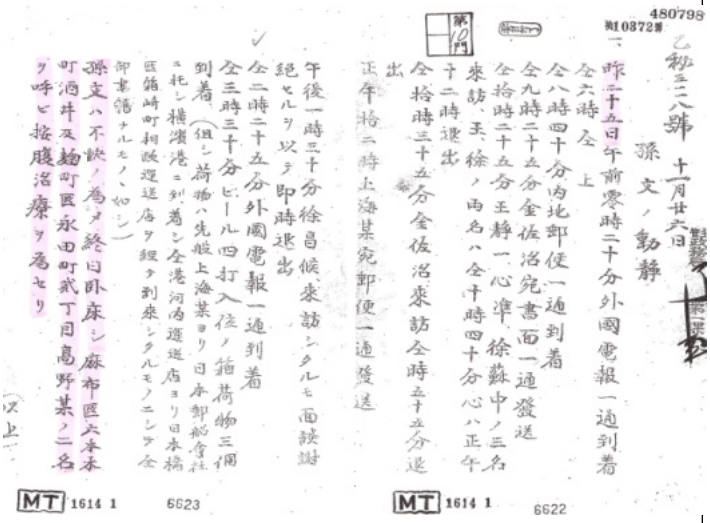
車田譲治さんの著書の件ですが‥‥私は、故国方千勢子さん（梅屋庄吉の長女）とも嘗てよくお会いし、彼女から最初に“梅屋史料”を見せて頂き、また、その長女、故小坂主和子（別名、珠訪子／私と同世代）さんとも親しくお付き合いし、史料の整理もお手伝いしていました。その間、車田さんとも２度ほどお話したり、お食事を共にする機会がありました。そうした時機に『国父孫文と梅屋庄吉』を頂戴したのですが、車田さんが、これは(原史料を使いましたが)“フィクションです”とはっきり言われたのを常に思い出しながら読んで来ました。ですから、年月日、人間関係、その他の事実関係に相異があっても問題にしないで来ました。ところが、ここ10年ばかりの内に同著が再版されてから、まるで根拠のある伝記のように扱われ、研究者の間では一時かなり問題になりましたが、現在ではそれも下火になり、現世のあれこれの思惑のなかに在るようですね。ただ、車田さんの著作は、梅屋庄吉と中国革命の一つの側面を世に紹介したという点では意味があると思っています。

《小坂文乃著『革命をプロデュースした日本人』》

梅屋庄吉の曾孫、小坂文乃氏に、『革命をプロデュースした日本人』という著書があり、プロローグに、「祖母から幾度も聞かされてきた物語」として、梅屋庄吉邸での孫文と宋慶齢の結婚披露宴の様子が描かれています。しかし、その日が大正４年11月10日で、車田譲治著『国父孫文と梅屋庄吉』中の記述、11月25日と異なっていることに今まで気付かなかったのはうかつでした。どちらも、国方千勢子氏（梅屋庄吉の長女）の話がもとになっているはずなのにどうしてでしょうか。

《日本外務省外交文書“孫文ノ動静”から》

外務省外交史料館のデータが、アジア歴史資料センターを介してネットで閲覧できるのは大変ありがたいことです。上述、車田譲治著が、孫文と宋慶齢の結婚式及び披露宴が行なわれたとしている大正4年11月25日と、小坂文乃著が結婚披露宴が行なわれたとしている同年11月10日の孫文の動静を日本外務省外交文書で見てみます。11月25日は、下にあげた記録の最後の三行の通りです。11月10日は、「午後零時三十分孫ハ外


480798
乙秘三二八號　十一月廿六日
孫文ノ動靜
一、昨二十五日午前零時三十分外國電報一通到着
仝六時仝上
仝八時四十分内地郵便一通到着
仝九時二十五分金佐沼宛書面一通發送
仝拾時二十五分王靜一、心準、徐蘇中ノ三名來訪、王、徐ノ両名ハ仝十時四十分、心ハ正午十二時退出
仝拾時三十五分金佐沼來訪仝時五十五分退出
正午拾二時上海某宛郵便一通發送
午後一時三十分徐昌候來訪シタルモ面談謝絶セルヲ以テ即時退出
仝二時二十五分外國電報一通到着
仝三時三十分ビール四打入佐ノ箱荷物三個到着（但シ荷物ハ先般上海某ヨリ日本郵船會社ニ托シ横濱港ニ到着シ仝港河内運送店ヨリ日本橋區鎗崎町相阪運送店ヲ經テ到來シタルモノニシテ仝郵書館ナルモノ、如シ）
孫文ハ不快ノ為メ終日臥床シ麻布區六本木町酒井及麹町區永田町武丁目高野某ノ二名ヲ呼ビ按腹治療ヲ為セリ
（以上）
MT 1614 1　6623　MT 1614 1　6622

出民国社ニ到リ同三時退出帰宅ス」とあり、このほか、外出の記録はありません。来訪者として、胡漢民、蔣介石、戴天仇ほかの名があります。両日とも、結婚式や披露宴があったとは考えられません。

「呉錦堂を語る会」の一員として、ちょっと残念な結果になりましたが、以上、報告致します。